胃癌手術例ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30770

十全會雜誌　第二十八卷第八號（第二百十一號）　大正十二年八月一日發行

原著

胃癌手術例ニ就テ

（金澤醫學會所演）

金澤醫科大學第二外科（主任泉敎授）
助手　宮村隆基

凡テノ癌ノ約四分ノ一ハ胃癌デ、胃ハ癌ニ對シテ最モ好發部位ノ一ツデアリマス。從ツテ吾人ハ臨牀上屢々胃癌ニ遭遇スベキデアリマスガ、當地方ニ胃癌手術例ノ少ナイノハ何故デアルカ吾々ノ不審トスル所デアリマス。一體胃癌ノ治療方面ニハ外科的療法ノ外ニ藥物的療法ヲ始メ、血清療法、「ヘモテラピー」「ラヂユーム」「フインゼンランプ」或ハ「レントゲン線療法等、種々ノ療法ヲ數フルコトガ出來マスガ、コレ等後揭ノ療法ハイヅレモ胃癌ノ永久治癒ニ向ツテハ何等ノ價値ヲ有セナイト信ズルノデアリマス。胃癌ノ根治療法ハ將來ハイザ知ラズ、現今ノ醫學ニ於テハコレヲ外科的ニ切除シ去ルヨリ外有力ナル方法ハナイト考ヘマス。最近一般ニ癌ノ「レントゲン治療法ガ行ハル、樣ニナリマシタガ、是ハ如何ナル生物學的作用ヲ癌腫ニ及ボスモノデアルカト云フニ、アル學派ハ「レントゲン線ガ實際癌細胞ヲ破壞シ得ル場合ガアルト言ヒ、アル學派ハ癌細胞ヲ破壞スルコトハ出來ナイガ、結締織ノ增殖ヲ促進シテ癌細

胞ヲ包埋シ間接ニ癌ノ增殖ヲ防グコトガ出來ルト述ベテ居マス。然ルニ又他ノ研究報告デハ結締織ノ增殖ヲ促進スルハ事實デアルガ、コノ「レントゲン線照射ガ却ツテ癌細胞ニ一定ノ刺戟ヲ及ボシテ結締織ノ增殖ヨリモ、ヨリ以上ニ癌細胞ノ增殖ヲ進メル不利ナ點ガアルト記載シテ居マス。又「レントゲン線ノ效力ハ癌腫ガ身體ノ表面ニ在ル場合ト深部ニ在ル場合ト異ナルベキデアリマスガ、今日ノ狀態デハ深部ノ癌腫ニ對シテハ尙效ヲ奏スルノ域ニハ達シテキナイ樣デアリマス。尙又藥物或ハ「レントゲン線ヲ用ヒテ治シ得タト云フ胃癌ガ果シテ胃癌デアツタカ、或ハコレト最モ紛シキ胼胝性潰瘍デアツタカ、コノ兩者ハ手術ニヨツテ現物ヲ目前ニ見テモ尙不明ナ事ガアル位デ今日ノ進ンダ「レントゲン線診斷ニヨツテモ尙鑑別ノ困難ナ場合ガアリハシナイカト思フノデアリマス。

然ラバ外科的手術ニヨル胃癌ノ永治ハ如何カト云フニ這ハ無論ソノ材料及ビ術者ノ技量如何ニモヨルコトデアルガ最近ノ報告ヲ見ルトメヨ—氏ノ「クリニック」ニ於ケル永治率ハ手術後三年以上ノモノガ三八%、五年以上ノモノガ二六%、ミクリッツ氏ノ所デハ三年以上ノモノガ、一八·五%、コッヘル氏ノ所デハ一八三%、我國ニ於テハ九州醫科大學第一外科デ一九·二%ト云フ成績ガ報告サレテキマス。然シコノ我國ノ成績ハ九年前ノ報告デアツテ、今日デハ尙ヨリ以上ニ良キ成績ガ擧ゲラレテ居ルト思ヒマス。特ニ近年胃癌切除ノ術式改良ハ著シク手術直後ノ死亡率ヲ減少セシメ、九年前ニハ九大第一外科ニ於テ約二九%デアツタノガ、一昨年泉博士ガ報告シテ居ラル、ノハ僅カニ八%ニ減少シテ居リマス。

コノ胃癌ノ外科的手術ニハ御承知ノ通リ姑息的手術法ト根治手術法トアリマスガ、前者ハ胃癌ノ永治ニハ直接何等ノ意味ヲ有セナイカラ茲ニハ申シマセヌ。胃癌ノ永治ニ對シテ問題トナルノハ卽チ胃癌切除デアリマス。

コノ胃癌切除ノ手術方法ハ胃ニ於ケル腫瘍ノ發生部位ニヨツテ種々異ナルベキデアルガ、現今外科醫ガ一般ニ用ユル術式ハ如何ナルモノデアルカト問フニ先ヅビルロ—ト第一、第二法、コッヘル氏法、クレ—ンライン、ミクリッツ氏法ヲ始メポリア氏法又近クハバルフォア氏法、メヨ—氏法等種々アリマス。現今世界各外科家ノ胃癌切除ノ報告ヲ

通覽スルニ大體ニ於テビルロ—ト第二法ニウェルフレル氏法ヲ行ツテブラウン氏ノ腸々吻合ヲ行フカ、又ハビルロ—ト第二法ニハツカ—氏ノ胃腸吻合ヲ行フモノガ大多數デアリマス。又ビルロ—ト第一法並ビニコッヘル氏法ハソノ術式ノ性質カラ云ツテモ腫瘍ノ比較的小ナル時ニ行ハルベキデ、胃ヲ切除スルコト大ナル時ニハ適當デアリマセン。

コレニ最近バルフォア氏法ガ漸次用ヒラル、樣ニナリ、又近來メヨ—氏法モ屢々人々ガ行フ樣ニナリマシタ。バルフォア氏ノ胃癌切除法ト云フノハ、マヅ胃癌發生部位ヲ周圍ノ諸臟器カラ分離シテ、幽門ト十二指腸トヲ分離シ、ソノ十二指腸ノ斷端ハコレヲ法ノ如ク煙草嚢縫合ヲ以テ埋沒シ次ニ腫瘍ヲ胃壁ト共ニ切除シテ、ソノ切除遊離端ハソノ儘開放シテオイテ空腸上部即チ十二指腸空腸皺襞カラ約十六糎ノ部ヲ求メ、之ヲ横行結腸ノ前ヲコヘテ持チ來ツテ胃ノ切除全長ニ渉ル胃腸吻合ヲ行フノデアリマス。一昨年泉博士ノ報告セラレタノヲ見マスニ、コノバルフォア氏法ハ從來行ハレテキル、ビルロ—ト第二法ニ比シテ術式ガ比較的簡單デ安全デ確實デ、手術時間モ短カク且ツ胃癌切除ノ如何ナル場合ニモ、コレヲ適用シ得ル、特ニ胃ノ大切除ヲ行ツタ場合ニ良イト云フコトデアリマス。

又メヨ—氏法ニハ新舊二法ガアリマス。新法ト云フノハ胃ノ切除端ノ上方大部分ヲ縫合シ、下部ヲ殘シ置キコレニ十二指腸ノ切除端ヲ吻合スルノデアツテコレハ大ナル胃癌切除ノ時ニハ適シマセヌ。

サテ以上ノ術式中イヅレヲ選ブベキカハ、云フ迄モナク術者ノ好ム所ニヨツテ異ナルコトハ勿論デアルガ、又胃ニ於ケル癌腫ノ發生部位、癌腫ノ大サ及ビ癌腫ト周圍諸臟器トノ關係等ニヨリ、ソノ場合ニ最モ適切ナルモノヲ選ブベキデアリマス。吾々モ胃癌ノ出來所ニ從ツテ各々其術式ヲ異ニシテ胃切除術ヲ行ツテキマシテ必ラズシモビルロ—ト氏ヤメヨ—氏ノ術式ノミニ則ルト云フコトハ致シマセヌ。

コヽニ最近手術致シマシタ症例ヲ一二申上ゲルト第一例ハ六十歳ノ婦人デ胃ノ自覺症狀ヲ訴ヘテカラ十四ケ月經過シテキタ胃癌患者デアリマス。腫瘍ハ胃ノ小彎ノ中央ニ位置シ小兒手拳大デアリマシタ。幽門部カラ分離シ始メ、小彎凡ソ二糎大彎約二〇糎ノ切除ヲ行ヒ胃腸ノ間ハバルフォア氏ノ法ニヨツテ吻合術ヲ行ヒマシタ。此吻合ヲ行ツタ空

腸ノ二脚間ニハブラウン氏腸々吻合ヲ施シマシタ。（標本供覧）

第二例ノ方ハ五十二歳ノ男子デ胃症狀發現以來約九ケ月ヲ經過シタ例デ腫瘍ハ胃ノ小彎ニ原發シ、コレヨリ胃ノ後面ニ沿フテ大彎ノ方ニ擴ガル約大人手拳大ノモノデアリマシタ。且ツ胃ノ後面ニ於テハ横行結腸ノ腸間膜トゴク强ク癒着シテ居リマシタ。ソコデコノ癒着ヲ剝離シヤウト試ミマシタガ、コノ癒着ハ非常ニ强クテ腫瘍ヲ完全ニ切除スル爲ニハ横行結腸ヲモ共ニ取リ除カナケレバナラナイ狀態ニアリマシタ。由テマヅ横行結腸ヲ約三五糎ト、ソレニ屬シタ腸間膜ヲ共ニ切除シテ結腸ノ斷端ハ三重縫合ニテ端々吻合ヲ行ヒマシタ。次ニ胃ノ方ハ小彎約十三糎大彎約三〇糎ヲ切除シ、胃ノ切除端ハ上方卽チ小彎ノ方カラ大部分ヲ二重縫合ニテ縫合シ、ソノ下方卽チ大彎ノ方デ約七糎ヲ殘シ置イテ、ソノ部ニ空腸ノ上部ヲメヨ—氏舊法ニ從ヒ吻合ヲ行ヒマシタ。コノ例モ亦空腸ノ兩脚間ニブラウン氏ノ腸々吻合ヲ施シマシタ。卽チコノ患者ハ胃ノ大部分ヲ切除シタガ爲ニ殘ツタ胃ノ部ガアマリニ少イノデ、コレニバルフォア氏法ヲモ施スコトハ困難デアルト考ヘタカラメヨ—氏舊法ニヨリ胃腸吻合ヲ行ヒ、更ニブラウン氏腸々吻合ヲ行ツタモノデアリマス。（標本供覧）

以上二例共手術ハ〇·五％ノ「ノボカイン」ニヨル局所麻醉ノ下ニ行ヒマシタ。手術ニヨル何等ノ危險症狀モナク、順調ニ經過シテ手術後第二日カラ重湯牛乳ヲ與ヘ、前例ハ第十二日カラ後例ハ第九日カラ粥食ヲ與ヘ、兩者共第十八日カラ常食ヲ與ヘ、第二十一日ニ退院セシメ、現在障碍ナク家事ニ從事シテ居リマス。

以上ハ只二例ノ手術例ヲ摘示シタニ過ギマセヌガ、要ハ胃癌手術ハ其例ニ從ツテ臨機適切ナル術式ヲ選ブベキデアルト云フコトヲ御承知ヲ願イタイノデアリマス。

終リニ尙一言申述ベタイノハ胃癌ノ早期手術デアリマス。胃癌手術直後ノ死亡率ヲ少クシ豫後並ビニ遠隔成績ヲ可良ナラシムル主ナル原因ハ、ソノ患者ガ自覺症狀ヲオコシテ、手術ヲ受クルニ至ルマデノ時日ノ長短ニアルト考ヘルノデアリマス。ミクリッツ氏ノ所デホフマン氏ガ報告シタ統計ニヨルト胃癌ヲ切除シ得タモノハ胃ノ症狀ガオコツテ

後平均九・五ケ月デ手術ヲウケタモノデ、切除シ得ナカツタモノハ平均十一・二ケ月デ手術ヲウケタモノト云フコトニナツテヰマス。僅カニコノ一二ケ月ガ胃癌患者ヲ助ケ得ルカ否カノ境界デアツテ胃癌ニ對スル永久治癒ニ對シテ如何ニ手術時期ガ重大ナ關係ヲ有スルカハ、コレヲ以テ見テモ明カデアリマス。尚コノ十一・二ケ月ト云フ數ハ古イ統計デ現今デハミクリッツ氏時代トハ餘程技術モ進歩シテ居マスカラ尚時日ヲ經過シタ例デモ切除シ得マス。現ニ吾々ノ例ニ於テモ胃症狀ヲ發シテ後十四ケ月經過シタモノニ胃癌切除ヲ施シテ良好ナル結果ヲ得テ居ルノデアリマス。

兎ニ角早期診斷早期手術ト云フコトガ手術ソノモノ、危險ヲ非常ニ少クシ又永治ト云フコトニ對シテモ、ヨリ良キ成績ヲモタラスコトハ議論ノ餘地ガアリマセヌ。